

## 富岡洋子作 「大人になりたい」

< 前編 >

- (効果音) (教室のガヤ)
- 元木 ...だろ？おれもそう思ったんだよ。
- 斉藤 デモさ、こっちの子のほうがムチムチプリンじゃん。
- 元木 そりゃ今村とは比べ物になんないけどさ。顔だけさ。
- 今村美紀 (かぶせる)何？ わたしが何だって？ 顔がどうしたって？
- 斉藤 いやいや、こっちの話。
- 上林麻衣子 あら、人のうわさ話なんて気分悪いじゃない。何よ。
- 元木 なんでもないって。あ！（美紀に取り上げられる）
- 美紀 わぁー、何これ？ これってもしかしてテレフォンクラブとかってやつ？
- 元木 おっと、ヤベえ。
- 麻衣子 えー！ やだー。どうしてそんなの、元木君が持ってるわけ？
- 元木 なんだよ。そんな不潔って目で見るなよ。たかがテレクラのカード持ってるだけじゃん。
- 美紀 ねえねえ、それでこのカードとわたしと関係あるわけ？
- 斉藤 そうそう。元木がさ、このカードの子と今村が似てるって。顔だけな。
- 美紀 顔だけ？ふーん。よく見ると、この子、スタイルもいいじゃない、わたしに似て。
- 斉藤 へ！ ぶっ飛びー！（笑い）
- 麻衣子ナレーション ここは青春中学 3 年 2 組。わたし、上村麻衣子。テレフォンクラブのカードなんて初めて見た。女の子がそれらしい格好でイヤな目つきして。あーヤだ。あんなの平気で学校に持ってくるなんて、しかも、それが美紀に似てるとかって。もうこれだから男の子って不潔。一緒にいた美紀、今村美紀は、小学校からの友達で、わたしと違ってハキハキしてる元気のいい女の子。自分でも顔やスタイルに自信持ってて、将来、芸能界に入りたいって言ってるんだ。それに比べわたしは…。そうね、よく言えば慎重派、悪く言えば、うーん、“いい子ぶりっ子”かなあ。
- (音楽) (ブリッジ)
- 麻衣子 ただいまあ。あれ、お母さん、晩ご飯まだなの？ わたしもうおなかペコペコだよ。
- 母 しょうがないでしょ。ちょっと義男叔父さんから電話があって話してたから、晩ご飯の支度が遅くなっちゃったのよ。
- 麻衣子 へえー。義男叔父さん？ 珍しいわね。なんかあったの？
- 母 ああ、おばあちゃんのボケがひどくなったんで、病院に入れたいんだって。義

男の奥さんはどうも口ばかり達者で、面倒見が悪いのよね。どうもあの人、好きに…。

(効果音) (電話の鳴る音)

麻衣子 はい、上林です。あ、幸子叔母さん、こんばんは。母に代わります。(小声で)お母さん、義男叔父さんそこから。はい。

母 はいはい。あら、幸子さん。先ほどはどうも。おばあちゃん、大変ね。幸子さんは面倒見がいいから助かるわ、ほんとに。(F0)

麻衣子モノローグ えー！ 何よ、お母さん。ったく調子がいいんだから。

ナレーション 母を見てると、大人のずるさ、調子よさ、外面と内面の使い分けを目の前でモロに見せつけられて、イヤになってしまう。そんなある日、学校の放課後

元木 よお、今村。駅前でお茶してかない？

美紀 へえー、いいよ。でも珍しいじゃない、元木君たちが誘ってくれるなんて。ねえ、麻衣子。

麻衣子 うん。

斉藤 いやあ、この間のテレクラカードの名誉挽回さ。行こ行こ。

ナレーション あまり気乗りしなかったけど、来てしまった。生まれて初めての喫茶店。なんかいけないことしてるみたいで、落ち着かない。

(効果音) (喫茶店のBGM)

元木 おい、今村もやる？

美紀 へえ、元木君もタバコやるんだ。

斉藤 常識だよ。もう中3だぜ。お前は？

美紀 うん、少しね。

麻衣子 ちょ、ちょっと美紀。いつから？

美紀 クラブの先輩たちとのコンパでさ。覚えちゃったの。(タバコを吸い、煙を吐く。)

麻衣子 (ゴホンゴホンむせる。)

美紀 斉藤君は、ふかしてるの？ 吸ってるの？

斉藤 あー、一番最初は見よう見まねで思い切り吸っちゃったから、ゲホゲホしちゃってさ、慣れるまでふかしたりもしたけどね。

元木 だれでも経験あるんだよな、その最初の一服がさ。(笑い)

ナレーション 別世界だった。目の前の男の子たちも、隣的美紀も、手馴れたしぐさでタバコを口に運んだり、灰を落としたりして誇らしげに話に興じている。

斉藤 今村、お前のクラブの先輩って男かよ。

美紀 うん？ どっちもいるよ。高校生だからね。

斉藤 じゃ、コンパって言うと酒は付き物だな。

美紀 お酒ったって、焼酎しょうちゅうなんかじゃないわよ。カクテルね。甘くっておいしいよ。飲みすぎると効くって。

元木 カクテルね。男なら生ビールだよな。おれはドライじゃありません、なんて。  
斉藤 いやいや、焼酎も腹にしみるぜ。今度、みんなで飲み会やりたいな。  
男子2人 (口々に)「いいね、それ」「やろうぜ」  
ナレーション なんだか置いてきぼりにされた感じ。やけに自分が子供に見えた。  
麻衣子 ただいまぁ。  
母 お帰り。遅かったじゃない。藤井さんがお待ちよ。  
麻衣子 あ、いけね。今日は木曜日だった。  
藤井智也 こんばんは、麻衣ちゃん。忙しそうだね。  
母 さ、勉強の前だけど、一杯いかが、藤井さん？ おビールなら軽いでしょ？  
藤井 あ、僕は結構ですよ。やらないので。  
母 あら、大学生はもう大人だもの、いいじゃないビールくらい。さあどうぞ。  
藤井 いえ、本当に好きじゃないんです、僕。  
母 あーら、お酒をたしなまないんじゃまだ青臭いって言われるわよ。  
麻衣子 お母さん、しつこいわよ。やーね。さ、藤井さん、じゃ家庭教師お願いします。  
藤井 そうだね。じゃ失礼します。  
ナレーション このお酒もたしなまないわたしの家庭教師、藤井智也さん。大学3年生の近所のお兄さん。わたしが受験ということで、お母さんたちが心配して付けてくれたんだけど、なかなか誠実そうな人で、わたしは正直気に入ってます。  
藤井 あれ、麻衣ちゃん。今日はタバコのおいがないか？  
麻衣子 え？ あ、ほんとだ。ヤだ、髪や服にしみ付いちゃったみたい。実はね、今日友達とお茶飲んだんだけど…。(FO)  
ナレーション わたしは藤井さんに今日の喫茶店でのことを話した。  
藤井 ふん。そんなことがあったの。僕にも覚えがあるな。大人ぶりたくてさ。  
麻衣子 え、藤井さんも中学生のころはそうだったの？  
藤井 うん。今思えば熱みたいなもんでさ。“これが、これこそが大人へのステップだ”みたいに思えちゃう。僕のころはマージャンやって、タバコやって、酒やって、その三点セットにバイクかな。もちろん、それに更に進んだやつは、女の子のナンパやって。“これで何人目”なんて得意がってた。  
麻衣子 へえー。それって普通の子のやること？ あ、ごめんなさい、変な言い方しちゃった。あの、だから…。  
藤井 不良ってことかい？  
麻衣子 あ、うん。  
藤井 うーん。僕もクソまじめってタイプじゃなかったけど、不良ってほどでもなかったよ。  
麻衣子 そうなんだ。タバコ吸ったり、お酒飲んだりするのは不良とは限らないんだ。でも、それが当たり前かって言うと、ちょっと違うんじゃないかなぁ。

藤井 うん、麻衣ちゃんの場合は正しいと思うよ。熱にかかってないんだね。あれじゃないかな、大人が楽しんでいるように見えることを、やってみたくなる年ごろなんじゃないかな。

麻衣子 大人の楽しみってそれだけ？ タバコは灰を悪くするし、お酒は内臓悪くする。わたし、大人になんかなりたくない。

藤井 どうして？ ずいぶん悲観的だね。

麻衣子 周りの大人を見てれば分かるよ。大人って、“ウソも方便”とか言って、ずるくて調子いいし、“世渡り上手”っていうのも、結局ずるいってことだし、子供みたいな気持ちではいられなくなるんだと思うの。そういう人は、青臭いとか、大人じゃないとかって言われるんでしょ。あーあ、わたし、16歳までで止めたいな。

藤井 ふうん。麻衣ちゃんてやっぱりシャイなんだな。まじめに考えてるんだね。

麻衣子 普通だと思うけど。

藤井 僕ね、思うんだけど、人って、何を見てるか、だれを見てるかで違ってくるんじゃないかな。、もしかしたら麻衣ちゃんは、周りの大人たちを見て、あんなふうなのはイヤだけど、きっと自分もそうなるんだろうな“って思うから、悲観的になるんじゃないかな。僕は、高校3年のときにね、すばらしい生き方をしてるなって思う大人の人に出会ったんだ。それが今、僕の行ってる教会の牧師先生さ。麻衣ちゃんの場合は考えるような大人ばかりじゃないよ、世の中は、ウソだと思ったら、確かめにおいでよ。ね？

ナレーション “なるほど”と思わずうなずいてしまったわたしだった。そうか、藤井さんはクリスチャンだったのか。どこか違うと感じたのは、そのためだったのだ。わたしの大人像のレベルが低かったんだと気づかされて、ちょっぴり安心した。

次の日、学校で 。

美紀 ねえ、麻衣子。今日寄り道してくけど、付き合う？

麻衣子 うん、いいよ。

美紀 早苗と綾香も一緒に行くんだ。

麻衣子 ふうん。どこへ？

美紀 お楽しみ。あ、来た来た。早苗、綾香、麻衣子も行くって。レッツゴー！

ナレーション 美紀たちのニヤニヤする妙な笑い顔に、ヘンな気配を感じながらついていくと、そこは駅の裏通りの公衆電話ボックスだった。

美紀 早苗、一番面白そうな店のカードにしようよ。あ、これいいね。ゲー。えーと...、9、0、7の...。

(効果音) (電話のプッシュ音)

ナレーション ボックスの外にいたわたしにも、中で何が始まったのか、ようやく見当がついた。

美紀 あ、もしもし、わたし、21歳のOLなんですけどお...。(F0)

ナレーション 聞いているわたしのほうが体中熱くなってしまった。ポーっとして、その後美紀が何をしゃべっていたのか、まるで覚えてなかった。

美紀 あー面白かった。28歳の会社員だって。「かわいい声してますね」だってさ。笑っちゃう。(女子笑い)今度綾香、電話してごらんよ。

ナレーション テレホンクラブに群がる大人をからかって楽しむことが、いつしか美紀たちの遊びの日課になった。わたしも、心の中で批判しながらも、ある日、断りきれずにとうとう引き込まれてしまった。一度その味を知ったら、あとは止めようがなかった。

(効果音) (電話の発信音)

美紀 あ、もしもし、わたし、23歳のOLですけど、あの、昨日の真木さんお願いします。(ほかの女子に)ふいふ、いるってさ。チャンス！ あ、もしもし、ええ、今日は時間が取れたの。ええ、じゃ15分後に駅前で。はい、楽しみに。じゃ。

(効果音) (受話器を置く音)

美紀 ヤッピー！ 15分後だよ。

麻衣子 どんな顔して来るんだろうねえ。

美紀 ロベルタのベストが目印だって。

ナレーション 危険な遊びは、どんどんエスカレートしていった。

<後編>

(効果音) (電話のブッシュ音)

(効果音) (電話の発信音)

美紀 あ、もしもし、わたし、23歳のOLですけど、あの、昨日の真木さんお願いします。(ほかの女子に)ふいふ、いるってさ。チャンス！ あ、もしもし、ええ、今日は時間が取れたの。ええ、じゃ15分後に駅前で。はい、楽しみに。じゃ。

(効果音) (受話器を置く音)

美紀 ヤッピー！ 15分後だよ。

麻衣子 どんな顔して来るんだろうねえ。

美紀 ロベルタのベストが目印だって。

ナレーション わたし、上村麻衣子。青春中学3年生。テレホンクラブにOLのふりして電話して、大人たちをからかって遊んでるのは、友達の今村美紀たち。初めは電話して、相手の反応を見たり、大人っぽいおしゃべりに浮かれたりしてたけど、だんだんエスカレートして、今日はとうとう呼び出してしまった。

美紀 来た？ どこどこ？ あ、あの赤いベストの男かな。

麻衣子 ヤだ、ダッセー。キョロキョロしてる。みっともなーい。見られてるのも知らないで、バッカみたい。(女子笑い)さ、行こ行こ。

美紀 面白かったね、麻衣子。ん？ 何ヘンな顔してんの？

麻衣子 ああの男の人、恥ずかしかったらうな。あんなことして、どこが面白いの？  
美紀 何言ってるのよ。麻衣子だって、好きでついてきたんじゃない。偉そうなこと言わないでよ。あ、ちょっと麻衣子、麻衣子ってば。

ナレーション 美紀の声を背に、わたしは駆け出した。頭をガーンと殴られたようで、返す言葉もなかったのだ。美紀たちのやってること、心ではよくないことだって批判しながら、つい引き込まれていってしまった自分が無性に情けなかった。

美紀 (エコー)何言ってるのよ。麻衣子だって、好きでついてきたんじゃない。  
麻衣子モノローグ 好きで？ そうかもしれない。わたし、悪いことだって分かってるのに…。あー、自己嫌悪！

ナレーション わたしはすっかり落ち込んでしまった。そんな自分から逃れたくて、数日後、わたしは担任の町田先生に一部始終を話した。

町田先生 何？ 本当か、それは？ 上林、本当なんだな？  
麻衣子 はい、先生。わたし、美紀たちの話を聞いたり、駅前で見たこともあります。  
町田先生 そうか。(ため息)なんてこった。ガキどもがくだらんこと考えおって。上林、よく教えてくれたな。

麻衣子 ああの、先生、わたしが言ったってこと…。  
町田先生 ああ、分かってる。言わんよ。  
(効果音) (始業のチャイム)  
男子 起立。礼。着席。  
町田先生 あー、今日のホームルームではだな、最近ちまたではやってるテレフォンクラブとかいうやつのもので、ちとみんなに聞きたいんだ。

生徒 (口々に)「テレクラ?」「どうして?」「なあに一体?」  
美紀たち (小声で)ちょっと、なんかヘンじゃない? あ、あいつ…。  
町田先生 おい、そこの女の子、いいか、よく聞けよ。お前たちは体は大きくなって。まだ子供なんだ。そんなところで遊ぶ暇があったら…。(F0)

美紀たち 「だれかチクったな」「麻衣子…」  
ナレーション 担任の先生の発言から、美紀たちはすぐに告げ口されたと気がついた。そして、だれが犯人かも。その日から、美紀たちはわたしに一言も口を利かなくなかった。そんなある夜、それは家庭教師の来る日だった。

(効果音) (ドアのノックオン)  
藤井 こんばんは。麻衣ちゃん、入るよ。  
(ドアを開けて中に入る)  
藤井 ん？ これだけ大きいボリュームでヘッドホンしてたら聞こえないね。こんばんは、麻衣ちゃん。  
麻衣子 なんだ、藤井さんか。  
藤井 「なんだ」はごあいさつだね。どうしたの？ 勉強の時間だよ。

麻衣子 はいはい、家庭教師様。ただいまわたしは音楽のレッスン中です。どうぞお静かに。

藤井 ほお。今日は“理由なき反抗”かい？ で、音楽聴きながら、なんのレッスンだい？ 失恋の痛手か、友達関係のトラブル？

麻衣子 うるさーい。友達なんて要らないの！

藤井 ピンポン、やっぱり友達か。なんだよ麻衣ちゃん。一人で悩んでないで、話してごらんよ。ね？

ナレーション この家庭教師のお兄さん、近所に住んでる大学 3 年生の藤井智也さん。なんでもクリスチャンだそうで、以前もわたしの愚痴を聞いてくれて助かったの。「実は…」って一気にテレクラ遊びと美紀たちからハブにされてることしゃべっちゃった。

藤井 そう。そんなことがあったんだ。つらかったね、麻衣ちゃん。

麻衣子 うん。でも告げ口ってのもいい方法ではなかったと思うんだけど。

藤井 いや、告げ口で君が仲間外れにされたことを言ってるんじゃないんだ。

麻衣子 え？

藤井 僕が「つらかった」って言ったのは、君が最初は嫌だと思っていたそんな遊びに、知らず知らずに染まっていったってことさ。心のどこかで“いけない”と思いながら、気がついたら一緒にやってる。いわば君の心と行動が別々に働いて、惨めな思いをしたんだなって思ったからさ。

麻衣子 あ、藤井さん、どうして分かるの？ ...そう、つらかった。思い切って、みんな先生に話したら、すっきりすると思ったけど、惨めさは変わらなかった。かえて、友達はいなくなっちゃうし、後ろめたさは募るばかりだし、もう散々....

藤井 うん。それは麻衣ちゃんの心に罪があるからさ。

麻衣子 罪？

藤井 うん。“いけない”という良心の声に逆らって、やってしまったこと。それは、ほかのだれでもない、麻衣ちゃん自身の責任だろ？ それを君は、自分は見たり聞いたりしただけの傍観者で、みんなそのお友達のせいにしようとした。自分を正当化しようとした。それは聖書で言ってる“罪”だよ。

麻衣子 藤井さんなら分かってくれると思ったのに、そうやってわたしを責めるわけ？

藤井 いや、違うんだ。そんな君のことを、だれよりもイエス様は....

麻衣子 (かぶせて)もういいわよ。聞きたくない。帰って！

ナレーション でもわたしは気づいていた。“罪”、それは、あの時からわたしの心のどこかでささやいていた言葉だった。でもわたしはそれをなおもかたくなに拒んでいた。

(音楽) I(ブリッジ)くらい漢字。

ナレーション それからしばらく、わたしはふさぎ込んでいた藤井さんの家庭教師も断って、学校でも独りであることが多くなった。そんなある日の昼食時間

美紀 うっ！（トイレの洗面所で吐く）

麻衣子 美紀？ 美紀、どうしたの？ 気分悪いの？

美紀 麻衣子、ほっといて！ なんでもないよ。…うっ！（また吐く）

麻衣子 ちょっと、ひどそうじゃない。保健室行こうよ。

美紀 ほっといてってば！ あんたとはもう絶交なんだから！

麻衣子 美紀…。

ナレーション そうだった。でもわたしは、なんとかしてもう一度仲直りがしたかった。藤井さんからズバリと言われたあの日以来、わたしには美紀に悪いことをしたという思いが募っていたのだ。それから数日後も同じ光景を目にして、“まさか”という嫌な予感を感じたわたしは、意を決して彼女を呼び止めた。

(効果音) (終業のチャイム)

麻衣子 ねえ美紀。話してくれなくてもいいの。でもちょっと聞いて。(間)もしかして美紀、あの… あれないんじゃないの？

ナレーション 美紀の顔がさっと変わった。怖い目でわたしを見ながら言った。

美紀 またチクる気？

麻衣子 違うよ。そんな気持ちで聞いたんじゃないよ。わたし、美紀のこと心配だから。

美紀 小さな親切、大きな迷惑。

麻衣子 美紀…。わたし、美紀がうらやましかったの。わたしの知らない大人の世界を知ってる美紀が。それで、自分もそんな世界を知りたいっていう思いが、いつの間にかだんだんエスカレートして、このまま行ったら、自分が自分でなくなるような気がして怖くなったの。チクったのは悪かったって思ってる。自分だけいい子になろうとしてた。ごめん。

美紀 そう素直に出られるとコケるんだよな。

ナレーション 美紀の顔がずっと和らいだ。美紀は久しぶりに以前のような親しい口調で話し始めた。

美紀 だれにも言えないじゃん、妊娠したなんて。ほんとのこと言うと、麻衣子が気がついてくれて、なんだかほっとしてるんだ。

麻衣子 美紀…。で、相手の人はこのこと知ってるの？

美紀 知らない。墮ろすからいいの。

麻衣子 そんな。知らせないの？

美紀 だって…。

麻衣子 美紀。ねえ美紀。相手の人ってだれなの？ あの先輩？ ねえ、そんな無責任なのってないじゃない。

美紀 責任とかなんとなかって世界じゃないんだよね。たまたまテレクラで会って、カッコよかったから“いいかな”って。

麻衣子 美紀！（平手打ち）あんた、そんなとこまで行ったの？ 好きでもないのに、面

白半分で大事なものを捨てたわけ？ そんな、そんなの不潔よ。大嫌い！

ナレーション 心からそう思った。美紀は大人になったんだ。心も体もずるくて汚い大人になってしまったんだ。わたしは夢中で走った。涙がポロポロこぼれた。ひとしきり走ったら、なんだか力が抜けてボーっと歩いていると、後ろから声をかける人がいた。

藤井 麻衣ちゃん。

麻衣子 藤井さん…。

藤井 よっ。元気になった？ まだ暗中模索かな？

麻衣子 どうしてこうタイミングいいのかしら、藤井さんって。まるでわたしが困っているときに現れるスーパーマンみたい。

藤井 お、落第した家庭教師から今日はスーパーマンに格上げだな。よし、聞こう。

麻衣子 うん、聞いて。ひどいんだ、全く。友達的美紀、ほら、ハブにされてた。それはちゃんと謝ったんだけどね、その彼女がテレクラの相手と寝て、妊娠するようなことになっちゃったわけ。それだけでもぶっ飛びなのに、おなかの赤ちゃんを墮ろすって言うんだよ。責任とかなんとかの世界じゃないって。遊びだからいいんだって。汚いよね、そんなの。

藤井 うーん。体は大人でも心は子供か。人間としてはまるで未成熟だな。親友の麻衣ちゃんとしては、その無責任さに我慢できないわけだ。

麻衣子 そう。でもわたし、怖いな。今は美紀のことそんな風に言えても、この間のテレクラ遊びみたいに、いつわたしもそんな大人ぶりに染まっていっちゃうかかんないもん。

藤井 そうか。そこに気づいたら、麻衣ちゃんもだいぶ自分自身が見えてきたんだ。

麻衣子 え？ そう… そうかな。

藤井 自分の本当の姿に気づかない人は、自信があって強そうだけど、心と行動が別々のあの惨めさを、いつもどこかで味わってるんだよ。

麻衣子 あ、それ、この前聞いた話ね？ 自分の中の罪。あの時は、藤井さん、ごめんなさい。あんまりずばり、本当のこと言われて、わたし…。

藤井 委員だよ、麻衣ちゃん。分かってるって。大人って、自由でなんでも好きなことできるように見えるけど、結構そうじゃないみたいだよ。長く生きれば生きるほど、その罪をたくさん抱え込むことになるからね。でもね、クリスチャン、つまりイエス・キリストにその罪を赦<sup>ゆる</sup>していただいた人は、もうそれに煩わされないんだ。これは僕の経験でもあるんだけど、神様にありのままの自分を受け入れてもらうとね、不思議と心が軽くなって、あの、心と行動が伴わないジレンマから解放されるんだ。すると、自分の話すことや行動に、本当に責任を持つようになる。それが神様の目から見た“大人”じゃないかな。

麻衣子 神様の目から見た大人か…。ねえ藤井さん、わたしもそうなりたいなあ。

ナレーション      そう言いながら、わたしは、大きく背伸びをしたのだった。

< 完 >